

# 源氏物語文体論の一方

加藤 宏文

## 一 文体と享受者

「文体」という用語は、現代では、使われる人や場などの違いによつて、ときどきに、さまざまな概念を表わしている。

たとえば、「この文章はデステだ。」というときのそれと、「これは柔らかな文体だ。」というときのそれとは、「文体」の概念のとらえ方は、大いに違っているといえよう。

つまり、「文体」とは、ある文章表現が持つ内容や形式から、その享受者がどんな印象を受けるかによつて、さまざまに規定され得るものだとすることができるといふことができる。

ところで、「源氏物語細流抄」に、つぎのような一節がある。

「宇治十帖の事、娘の大式の三位が筆といへる説あり。師説不用之。其故は文体前にかはれり、紫式部が筆にあらざといへる義なれど、是は態と文体をかへたる也。時四代、年七十年余の事を書る故に、其間に人の詞づかひなども、不知してかはりもて行き末代になるおもむきを見せたる也、尤式部が筆なるべし。」（増註湖月抄三〇五

ページから）

これは、その主張の正否は別としても、古来の「文体」概念のとらえ方の、いくつかの重要な側面を示唆している。すなわち、

一、「文体」は、表現者が異なると変わる。

二、「文体」は、表現者の意図によつて変わり得る。

三、「詞づかひ」（「文体」の、ひとつのとらえ方である。）

は、時代とともに変わる。

つまり、こゝでも、「文体」は、古来、一般的・規準的な面と、個性的・主體的な面とが、その概念として意識されてきたことがわかる。そして、この二つの面は、互いにかみ合い、一体となつて、享受者の文体印象をかたちづくる。とりわけ、一個の文章作品を対象としたばあいの文体研究においては、両者を識別することはできない。したがつて、方法論は、以上のことをも一つの前提として考えられなければならない。

しかし、文体の、個性的・主體的な面が、たとえば、源氏物語の文章表現の上で、なにがしかの特定の形状を示しているはずだといふ仮説は、さきの前提と矛盾することではない。

この点について、小林英夫博士のご説明をわたくしなりに引用させていただきますと、

「ある作家のある作品がある特定の文体効果を發揮するとすれば、彼の用いた言語はある特定の形状をとつてゐるにちがひない。かの印象はこの形状の仕業である。故に前者を後者によつて理由づける——これが私の考へるところの文体論の仕事にはかならない。」

(「文体論の建設」一五ページ)

また、逆に、享受者の側からいえば、かれが文章作品から受ける文体印象には、かならず、そのきっかけとなった「形状」があり、両者には、必然的な関係があると考えられるのである。わたくしは、一享受者の立場から出発して、わたくしなりに、この「形状」を記述しなければならない。

ところで、源氏物語におけるこのような「必然性」を、単に、きわだった「形状」というにとどまらず、表現者と享受者との、できるだけ生々しい接点においてとらえるためには、源氏物語の特性に思いをいたさなければならぬ。

さて、源氏物語において、その文体を基本的に規制するものは、日本語の文体一般に認められる特性であり、さらにいえば、それは、ことばによる表現が必然的に持つている、「線条性」「時間性」という特性である。

この特性を、享受者の側からいえば、「線条性」「時間性」の終結に対しての「待機性」ということであろう。それに対しての充足が遅いか早いか、享受者の心理に、あるいは緊張感、あるいは安定感を与えるからである。そして、それが、源氏物語においては、特に、個性的・主体的な文体の一側面に、大きなかゝりあり

を持つていると思われるのである。そういう印象を中心に「文体」を考察するとうなるであろうか。

たとえば、紫式部日記に、「よろしう書きかへたりしは、みなひき失ひて、」(日本古典文学大系「紫式部日記」四七三ページ)とあるように、表現者が、線条性が持つ自由と拘束との中で、空間的にも、推敲の手を施した結果の文体には、おのずと、かの女の本性や意図が表われているはずである。

そういう自由と拘束との中間にあって、表現者が考えることの一つは、「何を先に表現し、何をあとに表現するか。」ということであり、それが享受者にとっては、緊張感や安定感となつて、具体的な印象を意識するのである。

## 二 文体論の方法

(1)二の宮も、同じおとどの寝殿を時々御休み所にし給ひて、梅壺を御曹司にし給ひて、右の大殿の中庭君を得奉り給へり。(対校源氏物語新釈以下、源氏物語本文の引用においては同じ。〳〵句宮三五〇ページ)

(2)頭頭鶴首を、唐のよそひに事々しうしつらひて、梶とり棹さす董べ、皆髪ゆひて、唐土だたせて、さる大きな池のなかにさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれに面白く見ならはぬ女房などは思ふ。(胡蝶二〇ページ)

(3)これは源氏の御族にも離れ給へりし後の、大殿わたりにありけるわる御蔭の、落ちとまり残れるが、問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どものいひけるは、「源氏の御末々に、ハがごとどものまじりて聞ゆるは、我よりも年のかず積

り、ほけたりける人のひがごとく「や」など怪しがりける、何れかは誠ならむ。(竹河三八三ページ)

「何を先に表現し、何をあとに表現するか。」源氏物語を、こういう点に注意して読んでみる。このとき、ごく自然に享受者が注意するのは、とりわけ、「誰のこと、何のことをいつているのだろう。」という点であろう。いま仮に、この「誰のこと、何のこと」にあたるものを、わたくしなりに「主題」と呼ぶことにする。すると、源氏物語においては、一文における「主題」の提示の仕方が、かなり自由に、それだけに意図的に行なわれているのではないか、という仮説が生まれる。

たとえば、右に示した例文のうち、(1)の文においては、一文の主題に対しての、享受者の待機性には、文の冒頭で答えられている。つまり、一つの主題に添って、述部が展開している文である。「二の宮」で一貫し、安定した線条だといえよう。

それに対して、(2)の文においては、「童べ」に至って答えられたか見えながらも、述部はさらに展開し、結局は、「女房など」と、享受者にとっては、意外なところに落着いている。誰の立場からの描写だろうかと、答を待っている享受者の心は、じらされる。

一方、(3)の文においては、一文の主題は、つぎつぎにいゝ代えられて、文末に至っている。特異な例である。文節を味わいつつ、耳から聴く物語における「文」の、このような特異な曲折には、享受者の、主題に対する待機性が意図的に計算されているのではなからうか。

ところで、国語表現、特に待遇表現を巧みに駆使し得ていた時代の国語表現においては、一文においては、述部がむしろ中心であ

る。したがって、こゝにいう「一文の主題」は、その中に「隠されて居ったもの、包まれて居ったものが外に表わされるやうになったもの」(時枝誠記博士「国語学原論」三七一ページ)と考えなければならぬ。

とすると、一文の主題についての「あと先」の考察は、一文において展開し、文末にまで影響力を持っている述部をおさえることから出発しなければならぬ。

○左のおは殿は、六の君を宮に奉り給はむ事、この月にと思し定めたりけるに、斯く思ひの外の人を、この程より先にと思しがほにかしづき<sup>③</sup>多給ひて、離れおはずれば、いと物しげに思したりと聞き給ふもいとほしければ、御文は時々奉り給ふ。(早蕨二二二ページ)

たとえば、右の一文では、まず傍線を施した入つの述部がおさえられる。ところが、それらのうち、一文の線条に添って展開し、文末にまで影響を与えているのは、②③④⑦⑧であり、他の①⑤⑥は、それぞれ「事」「と」「も」に支えられて閉鎖している。一文の主題に関与するのは、前者のみである。

### 三 桐壺巻の文体 その一

○童に侍りし時、女房などの物語、説みしを聞きて、いとあはれに悲しく心深き事がなと、涙をさへなむおとし侍りし。(帚木四五ページ)

帚木巻における、右の左馬頭のことばや、「隆能源氏」東屋巻の一場面などからも推測されるように、源氏物語が、本来、冊子絵を

見ながら、読まれるのを耳から鑑賞したものであるとすると、一文の「主題」についてのこの考察は、さらに生々しい視点と結びつき得るのではないか。姫君たちは、恐らくは、ぼつりぼつりと、文節を中心に、一つ一つの述部をおさえながら、結局は誰のこと・何のことなのだろうか、と心はずませずに違いない。

このような、享受者の待機性が、一文の主題の動きによって、どのように充足されるか。それを意識したのであるう作者は、どのようにその意図をその動きに盛り込もうとしたか。そのあり方を、形状の上でとらえて、わたくしなりに整理すると、すべての文は、つぎの四つの類型に分類することができる。すなわち、

Ⅰ型文 主題が首尾一貫している文

Ⅱ型文 主題が首尾では一致しているが、途中での変化がある文

Ⅲ型文 主題が首尾で異なり、途中での変化が一回ぎりである文

Ⅳ型文 主題が首尾で異なり、しかも、途中での変化が複数である文

る文

そこで、右のように分類した四つの文の類型の、典型的な例を示すと、つぎようになる。( )内の記号は、同一主題を同一記号で表示したものである。

○Ⅰ型文 (A・A・A・A)

一の宮を見舞らせ給ふにも、若宮の御恋しさのみおもほしいでつ  
つ、親しき女房御乳母などを遣はしつ、有様を聞召す。(桐壺  
九ページ)

主題は、「帝」で一貫している。

○Ⅱ型文 (A・B・A・A)

母御息所は、影だに覚え給はぬを、「いとよう似給へり」と内侍

のすけの聞えけるを、若き御心地に、いとあはれと思ひ聞え給ひ  
て、常に参らまほしう、なづさひ見奉らばやと覚え給ふ。(桐壺  
二五ページ)

主題は、「光」「内侍のすけ」「光」「光」と変化している。

○Ⅲ型文 (A・A・B・B)

五六日さぶらひ給ひて、大殿に二三日など絶えなくにまで給へ  
ど、只今はさなき御程に、罪なくおぼしなして、いとなみかし  
づき聞え給ふ。(桐壺三〇ページ)

主題は、「光」「光」「左大臣」「左大臣」「左大臣」と変化し  
ている。

○Ⅳ型文 (A・B・C)

藤壺ならび給ひて、御覚えもとりになれば、輝く日の宮と  
聞ゆ。(桐壺二六ページ)

主題は、「藤壺」「御覚え」「人々」と変化している。

さて、それでは、この四つの文の類型が、桐壺巻においては、ど  
のような割合で分布しているのであろうか。ちなみに、他の四つの  
巻とともに、その割合を示すと、第一表のようになる。

第一表

	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型
桐壺 181文	96 (53.0%)	10 (5.5%)	46 (25.4%)	29 (16.0%)
藤裏葉 192文	123 (64.1%)	8 (4.1%)	34 (17.7%)	27 (14.1%)

幻	句宮	夢浮橋
132文	84文	51文
77 ( $\frac{59.1}{39.2}$ )	50 ( $\frac{59.5}{39.2}$ )	20 ( $\frac{39.2}{59.1}$ )
9 ( $\frac{6.8}{21.6}$ )	1 ( $\frac{1.2}{21.6}$ )	6 ( $\frac{21.6}{1.2}$ )
32 ( $\frac{24.2}{27.5}$ )	19 ( $\frac{22.6}{27.5}$ )	11 ( $\frac{27.5}{22.6}$ )
14 ( $\frac{10.6}{16.7}$ )	14 ( $\frac{16.7}{10.6}$ )	14 ( $\frac{10.6}{16.7}$ )

桐壺巻の、この割合のあり方は、同巻における源氏物語の一つの「文体」を示しているものといえよう。右の表によると、同巻においては、Ⅰ型文が全体の約半数を、Ⅱ型文が同じく約四分の一を、それぞれ占めており、ついでにⅢ型文、Ⅳ型文の順に多くなっている。

この割合は、他の四つの巻にも、ほぼあてはまるものといえよう。しかし、藤裏葉巻のⅠ型文、句宮巻のⅡ型文、夢浮橋巻のⅡ型文とⅢ型文などに見られる割合のゆれを無視することはできない。巻の特殊性によるのか、それとも、「ゆれ」は、むしろ、桐壺巻や幻巻の方にあるのか。いまのところ何ともいえない点である。

#### 四 桐壺巻の文体 その二

このような割合で分布している、桐壺巻の四つの文型のあり方は、一つの「文体」としての形状を示しているとはいえよう。しかし、このような数値が、それだけで、享受者の、生々しい文体印象の支えになるとするには、あまりにも形式的にすぎよう。

そこで考えられるべきは、このような文型の又それぞれと、桐壺巻における「場面性」とのかゝわり合いである。四つの文型それぞれが、表現者紫式部の、本性や意図の必然的な表われであるとする

ならば、右の「かゝわり合い」にも、何らかの必然性があるのではなからうか。

そういう仮説の上に立って桐壺巻における、この四つの文型の分布のありさまを、配列図によって示すと第二表のようになる。ちなみに、他の四つの巻の図をも、あわせ示すことにする。

(註) 数字は、各巻における文の順序。右側の符号によって、四つの文型の区別を つぎのように書き分けた。

1 符号なしⅠ型文。2 〇印Ⅱ型文。3 ●印Ⅲ型文。4 数字がゴチック体のものⅣ型文。Ⅰは三文以上の同文型連続の中間を略した事を示す。

右のように、四つの文型が、各巻においてどのように分布しているかを、配列図によって見ると、分布のあり方には、かなりのかたよりがあることがわかる。

この「かたより」の必然性を解釈する方法の一つとして、いま、同型文の連続と場面とのかゝわり合いをとりあげてみたい。つぎのようなことがいえようか。

#### 〇Ⅰ型文

「153-164」が、最もきわだった連続性を示している個所である。こゝは、「御祿の物、うへの命婦取りて賜ふ。」から、「作法世にめづらしきまでもてかしづき歸え給へり。」までである。つまり、光源氏元服の儀式の場面を、帝と左大臣との歌をもまじえて、客観的に描写した個所である。

#### 〇Ⅱ型文

かず少ない文型であるため、連続した個所は認められないが、強いてとり上げるならば、「26」と「28」の個所であろう。いずれ

第二表

夢 浮 橋	句 宮	幻	藤 裏 葉	桐 臺				
1	63	1	125°	63	1	121°	59	1
2	64	{	126	64	2	122	{	{
3	65	5	127	{	3	123	64	4
4	66	6	128	68	4	124	65	5
5	67	7	129	69	5	125	66	6
6	68	8	130	70	6	126	67	7
7	69	{	131	71	7	127	68	8
8	{	12	132	72	8	128	69	9
9	74	13	133	73	9	129	70	10
10	75	14	134	74	10	130	71	11
11	76	15	135	75	11	131	72	12
12	77	16	136	76	12	132	{	13
13	78	17	137	77	13	133	75	14
14	79	18	138	{	14	134	76	15
15	80	19	139	81	15	135	77	16
16	81	20	140	82	{	136	{	17
17	82	21	{	83	18	137	80	18
18	83	22	144	84	19	138	81	19
19	84	23	145	85	20	139	82	20
20	24	24	146	86	{	140	83	21
21	25	25	{	87	27	141	84	22
22	26	26	154	88	28	142	85	23
23	27	27	155	89	29	143	86	24
24	28	28	156	90	30	144	87	25
25	29	29	157	91	31	145	{	26
26	{	30	158	92	32	146	92	27
27	33	{	159	93	33	{	93	28
28	34	101	160	94	34	149	94	29
29	35	102	161	95	35	150	95	30
30	36	103	162	96	36	151	96	31
31	37	104	163	97	37	152	97	32
32	38	105	164	98	38	153	98	33
33	39	{	165	99	39	{	99	34
34	40	108	166	100	40	164	100	35
35	41	109	167	101	41	165	101	36
36	42	110	168	102	42	166	102	{
37	43	111	169	103	43	167	103	39
38	44	112	{	104	44	168	104	40
39	45	113	179	105	45	169	105	41
40	46	114	180	{	{	170	106	42
41	47	115	181	111	49	171	107	43
42	48	{	{	112	50	172	108	44
43	49	118	184	113	51	173	109	45
44	50	119	185	114	52	174	110	46
45	51	120	186	115	53	175	111	47
46	52	121	{	116	54	176	112	48
47	53	122	192	117	55	177	113	49
48	54	123		118	56	178	114	50
49	55	124		119	57	179	115	51
50	56	125°		120	58	180	116	52
51	57	126		121	59	181	117	53
	58	{		122	60		118	{
	{	132		123	61		119	57
	62	68		124	62		120	58

も長文で、「27」は、I型文である。こゝは、桐壺更衣が里に下るにあたっての、帝の躊躇の御心を、会話文を主体として表現した個所である。「28」は、「……まかんでさせ給ひつ。」と結ばれている。

#### ○II型文

「146~149」がとりあげられよう。このあたり(136~151)は、I型文のみが連続している中に、II型文が多く散在している。さて、こゝは、I型文でとりあげた個所の直前にあたる場面である。すなわち、光源氏元服の儀式の始まりから、光源氏の簞座までを、帝や皆人らの涙をはさんで、客観的な描写を続けているところである。

#### ○III型文

「30~34」がとりあげられよう。(ただし、「31」は省く。)こゝは、「いとあへなくて」帰って来た使いの口から、更衣の死を聞いたときの、帝の悲しみの描写の、いわばクライマックスにあたる個所である。

さて、右のようなこゝろみの結果が、はたして、他の連続個所をはじめ、一つ一つの文についてもあてはまるかどうかは、わからない。しかし、他のいくつかの連続個所からも推測できることは、I型文・II型文は、比較的客観的な描写の場面で、I型文・II型文はそれに対して、登場人物の心理の動きを描写する場面が多いように思われる。この文型とこの場面と、それが、享受者の文体印象の一面の大きな支えになっているのではあるまいか。

以上、桐壺巻を中心に、一つには文型の数的な割合から、二つには、それらの文型の分布を場面性の面から、「文体」を考察してみ

た。一つの方法を示すにとどまった。

— 昭和37年卒、京都府立加悦谷高等学校 —  
(一九六三・一一・二九)